

ジェンダーおよび学歴による将来像の違い

上 野 淳 子

男女共同参画社会の流れに逆行するように、若年層で専業主婦志向や性別役割分業を肯定する意見が増えつつある。しかし、家庭観・仕事観にはジェンダーや社会的階層による違いが存在すると考えられる。本研究では、ジェンダーと女性の学歴によって将来像が異なるか検討した。四年制大学の女子学生77名、短期大学の女子学生66名、男子大学生115名に質問紙調査を実施し、3群間の将来像を「母性愛」信奉傾向、仕事観も含め分析した。女子短大生の将来像は家庭を中心に構成され、志望する職業ははっきりしているが、それは結婚・出産までの一時的、非典型のものであり、専業主婦志向と関連する「母性愛」信奉傾向も高かった。男子大学生の将来像は仕事に関係するものが多かった。女子大学生の結果は男子大学生と近く、ジェンダー間より学歴間の差が大きかった。しかし、女子大学生の専業主婦希望度や勤続希望度は女子短大生と差がなく、保守的傾向は女子大学生にも見られた。仕事の負担感は女子短大生が低く男子大学生は高い傾向があったが、女子大学生は仕事の負担を大きく感じる場合に専業主婦という選択肢を考え、そうでない場合に仕事を持つことを志向していた。

キーワード：大学生、短期大学生、母性愛、仕事観、性別役割

Key Words: university student, junior college student, maternal love, work values, gender role

1. 問題と目的

男女共同参画社会の実現が目指される一方、20代・30代の若年層においてそれに逆行する傾向が見られる。「男女共同参画社会に関する世論調査」(内閣府, 2009)によると、女性の働き方について「女性は子どもができて、ずっと職業を続ける方がよい」とする者の割合は各世代を通じて最も多いが、20代および30代においてその割合が減る傾向にあった。特に出産後、子どもが小さいうちは専業主婦を望む傾向が若年層で強くなっているのである。また、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性別役割分業への賛成も30代を中心に復調の傾向を見せている(内閣府, 2009)。別の意識調査結果(内閣府男女共同参画局, 2009)では、性別役割分業への賛成と反対は拮抗していた。男性は世代があがると賛成が多くなる一方、女性は全ての世代で反対が多かった。しかし、女性では40代よりも30代で、30代よりも20代で賛成が多くなるという逆転現象が見られた。

なぜ若年層に保守的傾向が見られるようになったのだろうか。若年層の考える性別役割分業は、必ずしも伝統的なものと同一ではないことに注意すべきである。そもそも、新しい性別役割分業、「新・専業主婦志向」が紹介されたのは、平成10年版厚生白書であった(厚生省, 1998)。「新・専業主婦志向」は、「男は仕事、女は家事」という伝統的性別役割分業とは異なり、

「男は仕事と家事、女は家事と趣味（的仕事）」という分業志向である（小倉, 2003）。この背景には閉塞的な経済情勢がある。若年層の低所得化は著しい（内閣府, 2011）。経済的弱者である女性は、男性よりも経済的不況の影響を大きく被っている。女性の社会参加を促す声もむなしく、出産前後で就労継続している女性は2割強であり、その割合はここ20年変化していない（内閣府, 2011）。育児休業の利用者は増え、保育所の整備が進められているとはいえ、女性が就労すること、就労継続することは依然困難な状況で、経済的に男性に依存せざるをえない場合が多いのである。一方で、従来の妻役割・母親役割を離れ、自分らしく生きたいという個人化志向も顕著である。若年層の専業主婦志向は個人化を否定するものではなく、経済的に夫に依存しつつ、かつ家事育児にも夫の参加を得、その分業になった妻は趣味（的仕事）に生きがいを見出すという自己実現の志向である。実際、百瀬（2009）は専業主婦にも個として生きる志向があり、それは専業主婦という生き方と矛盾せず、妻・母の役割を離れずにさらに個として生きようとするものであることを見出している。

また、性別役割分業を支える理由の一つに、根強い母性神話・三歳児神話がある。性別役割分業の賛成理由で最も多いのは、「子どもの成長にとって良いと思うから」である（内閣府男女共同参画局, 2009）。30代・40代の女性を対象とした調査（内閣府男女共同参画局, 2007）は三歳児神話の健在ぶりを示した。すなわち、子どもが3歳までは働きたくない女性が多いが、中学生以上になると9割以上が働くことを希望していた。

なお、このような専業主婦志向は簡単にかなうものではなく、未婚化・少子化を生んだ（山田, 1999）。若年層の低所得化によって、経済的に家庭を支えられる男性、つまり結婚相手としてふさわしい男性は少なくなり、結果ほとんどの者が結婚を希望しているにも関わらず未婚者が増えている（内閣府, 2011）。未婚化・少子化は、日本女性がリベラルになったことを意味するわけではない（Aono & Kashiwagi, 2011）。

しかし、若年層において一様に男女共同参画の意識が希薄になっているわけではないという指摘も多い。性役割観は若いほど弱まる傾向にある（武知, 2008）。大野（2008）は、稼ぎ手役割にこだわらず、家庭にも仕事同様積極的に参加する、男女平等意識の高い男性のタイプを見出した。未婚化・少子化も、上述した性別役割分業の意識が生み出したという観点だけではなく、生き方の多様化・従来の性別役割分業意識の変化と関連づけられてもいる（永久, 2010）。つまり、若年層内にも多様な層が存在し、その差異に目をむけることが必要なのである。

まず、ジェンダーによる差異が存在する。例えば、性役割観については、男性のほうが女性よりも保守的である（園田, 2007; 武知, 2008; 若松・柏木, 1994）。一方で専業主婦志向は女性の方が男性よりも強い。2010年の「第14回出生動向基本調査」（国立社会保障・人口問題研究所, 2011）では専業主婦を理想とする未婚女性は19.7%で、1997年の第11回調査以来ほとんど変わっていない。しかし、女性に専業主婦を期待する男性は10.9%しかおらず、1987年の第9回調査より減少を続けている。女性の意識はリベラルになりつつも、経済的には男性への依存を求める。しかし、稼ぐ自信がない男性は女性にも経済的自立を求める。男性と女性それぞれの意識と関係のあり方に、多様な矛盾とミスマッチが存在することがわかる。

さらに、ジェンダー内でも学歴や就労形態など多層化が進んでおり、それを考慮した研究が

必要とされている (Gilbert & Rader, 2001; 武知, 2008)。学歴が高いほど性別役割観や性別役割分業に否定的であり (目黒, 2000; 園田, 2007; 若松・柏木, 1994)、母親役割だけにこだわらない生き方は、高学歴 (永久・渡邊・柏木, 2007) や有職 (柏木・永久, 1999) であるほど強まる。学歴は就労形態と関連しており、若年層を中学・高校卒と短大・大学卒に分類し、就業形態との関係を検討した白川 (2008) は、男性では学歴と就業形態の関係ははっきりしないが、女性は低学歴層ほど非典型・無業の傾向が強く、女性は最初典型雇用でもそこから離脱してしまうこと、その理由は専門職でないことにあり、典型雇用で働き続けるには高学歴で専門職につくことが重要であるとしている。小倉 (2007) は、学歴によって結婚意識や結婚相手に求めるものが異なると指摘し、「新・専業主婦志向」は短大卒女性に特有のものと位置づけている。専門職に就き、結婚後も変わらず仕事を続けることを望む四年制大学卒の女性と比べ、短大卒女性は“どうせ自分たちが一生続けられる、遣り甲斐も収入もあり、子育てと両立できるゆとりのある仕事に就けるとは思っていない” (p.41) ため、結婚して専業主婦となることに自己実現を求めるのである。実際、短大の女子学生は固定的性別役割分業を否定しつつ、男性に精神的・経済的に依存しようとする意識が指摘されている (東福寺, 2010)。しかし、専業主婦を希望するかどうかと、経済力のある男性と結婚して専業主婦になれるかどうかは別の問題である。結婚は同階層内でなされることが多いため、実際は高学歴女性に専業主婦率が高い。若松・柏木 (1994) も四年制大学卒の女性のほうが短大卒の女性よりも専業主婦率が高いこと、高学歴者の勤務形態はフルタイムと無職に二極化していること、学歴が高いほうが自己実現的理由で働くことを見出している。

本研究の目的は、未婚化・少子化のもとで、社会に出る前の大学生がどのような将来像を描いているのか明らかにすることである。性別役割分業の復調に見られるような保守化の傾向が見られるのか、ジェンダー・学歴によって将来像に違いが見られるのか検討する。学歴では特に、短期大学的女子学生と四年制大学的女子学生の差を取り上げる。

将来像の検討の際注目するのは、家庭役割と職業役割についての意識である。これらは成人期の課題として重要であるが、その配分には葛藤がつきまとう (永久, 2010)。家庭役割のうち、特に母親役割については、既に述べたように母性神話の影響が根強く、母性は就労と対立するものとして位置づけられてきた (Woollett & Marshall, 2001)。母性は成人女性の中心的アイデンティティであり、緊張や矛盾と共に共有されている一方、父性は成人男性のアイデンティティの単なる一側面にすぎないとされる (Woollett & Marshall, 2001)。性別分業意識には高学歴の女性ほど反対するが、母性意識は伝統的なものから変化しにくい (目黒, 2000)。本研究では、家庭役割に関係するものとして母性を取り上げ、職業役割の意識と共に、ジェンダーと学歴、将来像との関係を検討する。

なお、将来像の把握には、将来の予想に関する自由記述と、将来像の希望度評定の2種を用いる。自由記述は個人にとって比較的意識度・関心度の高い領域が得られるというメリットがあるが (平川 (上野)・尾崎, 2000)、そもそもどの程度将来像を描けるかという時間的展望の長さには個人差が見られるため、評定もあわせて検討することが有用である。また、将来像の予想と希望は必ずしも一致しない。例えば、独身者を対象とした調査 (国立社会保障・人口問

題研究所, 2011) では、女性の理想のライフコースで最も選択されるのは結婚・出産時にいったん退職する再就職コースであり (35.2%)、続いて結婚・出産後も働き続ける両立コースである (30.6%)。しかし、現実にとどる予定のコースとしては両立コースは低くなり (24.7%)、理想の実現を困難と見なしていることが明らかである。現実的予想として理想より高くなるのは再就職や非婚就業コースである (国立社会保障・人口問題研究所, 2011)。実際、子育て後の就労を希望していても、現実には働いていないか、フルタイム希望でもパート・アルバイトにしかつけない場合が多い (内閣府男女共同参画局, 2007)。よって、予想とは別に希望を把握することによって、理想と現実の差も含めて将来像を多面的に検討することができよう。

2. 方法

(1) 調査参加者と手続き

2009年10月に、大阪の私立大学に所属する学生を対象として質問紙調査を行った。授業中に質問紙を配布・回収した。回答者には短期大学に所属する男性が数名含まれていたが、学歴とジェンダーによる差異を検討するという目的のため分析から除外した。よって男性の調査参加者は全て四年制大学生となった。さらに回答に不備があった者を除いた最終的な調査参加者は258名となった。平均年齢は19.70歳 ($SD=1.10$)、男性は115名 (44.6%)、女性は143名 (55.4%) であった。そのうち四年制大学の女子学生は77名 (29.8%)、短期大学の女子学生は66名 (25.6%) であった。

(2) 調査内容

将来像自由記述 「15年後のあなたはどんな生活をしていると思いますか。できるだけ具体的に書いて下さい」と自由記述させた。ライフステージによる変化も捉えられるよう、30年後の将来像についても同様に自由記述させた。

将来の希望度評定 「あなたの将来について、あてはまると思う数字に○をして下さい」と教示し、「希望する仕事がある」(仕事希望度)、「十分な収入を得られる仕事に就きたい」(収入希望度)、「就職できたら辞めずに続けていきたい」(勤続希望度)、「結婚したい」(結婚希望度)、「子どもをもちたい」(子ども希望度)、「自分/配偶者が専業主婦を希望する」(専業主婦希望度) について、それぞれ「まったくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

「母性愛」信奉傾向尺度 伝統的な母親役割への信念を捉えるため、江上 (2005) の「母性愛」信奉傾向尺度 (12項目) を用いた。「母性愛」信奉傾向とは、「社会文化的通念である伝統的性役割観に基づいた母親役割を信じそれに従って養育を実践する傾向」と定義され (江上, 2005)、ジェンダーや子どもの有無を問わず回答できる。「まったくそう思う」から「まったくそう思わない」までの5件法で回答を求めた。

仕事観尺度 福丸・無藤・飯長 (1999) の20項目を用いた。仕事を持つことの意味づけを問うものであり、学生であっても回答できる。「将来の仕事に関してあなたの考えに一番近い番号に○をして下さい。なお、ここでいう『仕事』とは、金銭的な報酬を得るものであり、家事

は含みません」と教示し、「まったくそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法で回答を求めた。

3. 結果

(1) 将来像自由記述の分類

15年後の将来像は平均95.75字 ($SD=69.34$)、30年後の将来像は平均62.07字 ($SD=39.34$) の記述が得られた。以後は双方を区別せず分析を行った。記述内容を心理学の教員2名で分類し、一致しない場合は協議したところ、41カテゴリに分類された。これらのカテゴリは、さらに「経済状況」、「仕事」、「家庭」、「余暇」、「健康」、「生活感情」の6つの上位カテゴリに分類された (Table1)。

Table1 将来像記述カテゴリ

I. 経済状況	家購入 車購入 貯金 教育費 安定した/十分な収入 低収入・生活苦
II. 仕事	就職・仕事 出世・仕事の成功 パート・アルバイト 早期退職 解雇 共働き 妻が専業主婦 仕事と家庭の両立 子の成長に伴う仕事再開
III. 家庭	結婚・家庭を築く 独身 配偶者の協力/支え 家事 子の誕生・育児 子の進学/就職/結婚 孫の誕生
IV. 余暇	趣味・レジャー 配偶者/子とのレジャー 親との交流 友人/社会との交流 田舎暮らし/畑仕事 ペット 海外暮らし
V. 健康	健康・美容 病気 死
VI. 生活感情	配偶者/子と仲良しな 幸せな・明るい・楽しい・満足な 多忙な・充実した 生活に追われた・疲れた 安定した・落ち着いた・平和な 人間的に成長した ゆっくりした・のんびりした 辛い・苦しい・悩みがある 普通な・平凡な さびしい・孤独な 楽しくない・つまらない 一生懸命な・頑張った

四年制大学の女子学生 (女子大学生)、短期大学の女子学生 (女子短大生)、男子大学生で、記述内容が異なるか検討した。記述カテゴリの度数と出現率を多い順に示したのがTable2である。それぞれのカテゴリの人数について χ^2 検定、残差分析を行った。なお、期待度数5以下のものがあつた場合、検定結果の正確性が欠けるため、カテゴリを分析から除外した。

「I. 経済状況」では、「安定した/十分な収入」で女子短大生が有意に少なかった ($\chi^2(2)=7.78, p<.05$; 調整済み残差-2.8, $p<.01$)。

「II. 仕事」では、「解雇」以外の全てのカテゴリで人数の偏りが有意であつた。女子短大生が少なく男子大学生が多いのが「就職・仕事」 ($\chi^2(2)=45.37, p<.001$; 女子短大生調整済み残差-5.7, $p<.001$; 男子大学生調整済み残差6.1, $p<.001$) および「出世・仕事の成功」 ($\chi^2(2)=14.11, p<.001$; 女子短大生調整済み残差-2.3, $p<.05$; 男子大学生調整済み残差3.7, $p<.001$) であつた。反対に、女子短大生が多く男子大学生が少ないのが「パート・アルバイト」 ($\chi^2(2)$

=59.21, $p<.001$; 女子短大生調整済み残差7.5, $p<.001$; 男子大学生調整済み残差-5.3, $p<.001$)、「妻が専業主婦」($\chi^2(2)=60.49$, $p<.001$; 女子短大生調整済み残差7.0, $p<.001$; 男子大学生調整済み残差-6.6, $p<.001$)、「子の成長に伴う仕事再開」($\chi^2(2)=51.34$, $p<.001$; 女子短大生調整済み残差6.7, $p<.001$; 男子大学生調整済み残差-5.7, $p<.001$)であった。また、「早期退職」は女子短大生が有意に多かった($\chi^2(2)=7.09$, $p<.05$; 調整済み残差2.7, $p<.01$)。「仕事と家庭の両立」は女子大学生・女子短大生が多く男子大学生が少なかった($\chi^2(2)=16.23$, $p<.001$; 女子大学生調整済み残差2.1, $p<.05$; 女子短大生調整済み残差2.4, $p<.05$; 男子大学生調整済み残差-4.0, $p<.001$)。

「Ⅲ. 家庭」では、女子短大生が多く男子大学生が少ないのが「結婚・家庭を築く」($\chi^2(2)=10.33$, $p<.01$; 女子短大生調整済み残差3.0, $p<.01$; 男子大学生調整済み残差-2.6, $p<.01$)、「家事」($\chi^2(2)=22.26$, $p<.001$; 女子短大生調整済み残差3.8, $p<.001$; 男子大学生調整済み残差-4.4, $p<.001$)「子の誕生・育児」($\chi^2(2)=40.27$, $p<.001$; 女子短大生調整済み残差5.4, $p<.001$; 男子大学生調整済み残差-5.7, $p<.001$)、「子の進学/就職/結婚」($\chi^2(2)=20.99$, $p<.001$; 女子短大生調整済み残差4.4, $p<.001$; 男子大学生調整済み残差-3.5, $p<.001$)、「孫の誕生」($\chi^2(2)=22.47$, $p<.001$; 女子短大生調整済み残差4.4, $p<.001$; 男子大学生調整済み残差-3.8, $p<.001$)であった。

「Ⅳ. 余暇」では、「趣味・レジャー」で男子大学生が少なく($\chi^2(2)=7.69$, $p<.05$; 調整済み残差-2.8, $p<.01$)、「配偶者/子とのレジャー」は女子短大生が多く男子大学生が少なく($\chi^2(2)=15.83$, $p<.001$; 女子短大生調整済み残差3.6, $p<.001$; 男子大学生調整済み残差-3.4, $p<.001$)、「友人/社会との交流」は女子短大生が多かった($\chi^2(2)=9.07$, $p<.05$; 調整済み残差3.0, $p<.01$)。

「Ⅴ. 健康」に属するカテゴリには、有意な人数の偏りは見られなかった。

「Ⅵ. 生活感情」では、「配偶者/子と仲良しな」で女子短大生が多く男子大学生が少なかった($\chi^2(2)=12.12$, $p<.01$; 女子短大生調整済み残差3.3, $p<.001$; 男子大学生調整済み残差-2.6, $p<.01$)。「多忙な・充実した」は女子大学生が多く($\chi^2(2)=10.84$, $p<.01$; 調整済み残差3.2, $p<.001$)、男子大学生が少ないのは「普通な・平凡な」($\chi^2(2)=6.16$, $p<.05$; 調整済み残差2.4, $p<.05$)、「一生懸命な・頑張った」($\chi^2(2)=6.48$, $p<.05$; 調整済み残差2.5, $p<.05$)であった。

Table2 将来像記述カテゴリの度数および出現率

女子大学生	n	%	女子短大生	n	%	男子大学生	n	%
Ⅲ. 結婚・家庭を築く	63	81.8	Ⅲ. 子の誕生・育児	64	97.0	Ⅱ. 就職・仕事	94	81.7
Ⅲ. 子の誕生・育児	58	75.3	Ⅲ. 結婚・家庭を築く	62	93.9	Ⅲ. 結婚・家庭を築く	86	74.8
Ⅱ. 就職・仕事	43	55.8	Ⅵ. 幸せな・明るい	37	56.1	Ⅲ. 子の誕生・育児	61	53.0
Ⅵ. 幸せな・明るい	37	48.1	Ⅲ. 子の進学／就職／結婚	34	51.5	Ⅵ. 幸せな・明るい	46	40.0
Ⅳ. 趣味・レジャー	28	36.4	Ⅲ. 妻が専業主婦	30	45.5	Ⅱ. 出世・仕事の成功	33	28.7
Ⅵ. 多忙な・充実した	25	32.5	Ⅱ. パート・アルバイト	27	40.9	Ⅳ. 趣味・レジャー	23	20.0
Ⅲ. 子の進学／就職／結婚	22	28.6	Ⅱ. 子の成長で仕事再開	25	37.9	Ⅲ. 子の進学／就職／結婚	22	19.1
Ⅳ. 配偶者／子とのレジャー	16	20.8	Ⅳ. 趣味・レジャー	23	34.8	Ⅵ. 一生懸命な・頑張った	22	19.1
Ⅰ. 安定した／十分な収入	15	19.5	Ⅳ. 配偶者／子とのレジャー	23	34.8	Ⅰ. 安定した／十分な収入	21	18.3
Ⅱ. 仕事と家庭の両立	15	19.5	Ⅵ. 配偶者／子と仲良しな	22	33.3	Ⅵ. 普通な・平凡な	21	18.3
Ⅲ. 妻が専業主婦	15	19.5	Ⅱ. 就職・仕事	21	31.8	Ⅵ. 安定した・落ち着いた	20	17.4
Ⅵ. 配偶者／子と仲良しな	14	18.2	Ⅲ. 孫の誕生	18	27.3	Ⅵ. 多忙な・充実した	19	16.5
Ⅰ. 家購入	12	15.6	Ⅱ. 仕事と家庭の両立	14	21.2	Ⅵ. 配偶者／子と仲良しな	14	12.2
Ⅱ. 共働き	12	15.6	Ⅲ. 家事	13	19.7	Ⅳ. 配偶者／子とのレジャー	12	10.4
Ⅳ. 親との交流	12	15.6	Ⅳ. 友人／社会との交流	13	19.7	Ⅰ. 家購入	10	8.7
Ⅱ. 子の成長で仕事再開	10	13.0	Ⅰ. 家購入	8	12.1	Ⅵ. ゆっくり・のんびりした	10	8.7
Ⅵ. 安定した・落ち着いた	10	13.0	Ⅵ. 多忙な・充実した	8	12.1	Ⅳ. 友人／社会との交流	8	7.0
Ⅱ. 出世・仕事の成功	9	11.7	Ⅵ. 安定した・落ち着いた	8	12.1	Ⅰ. 貯金	7	6.1
Ⅲ. 孫の誕生	9	11.7	Ⅱ. 早期退職	7	10.6	Ⅴ. 死	7	6.1
Ⅲ. 家事	9	11.7	Ⅱ. 出世・仕事の成功	6	9.1	Ⅵ. 人間的に成長した	7	6.1
Ⅵ. ゆっくり・のんびりした	9	11.7	Ⅵ. 一生懸命な・頑張った	6	9.1	Ⅵ. 楽しくない・つまらない	6	5.2
Ⅵ. 辛い・苦しい	9	11.7	Ⅵ. ゆっくり・のんびりした	5	7.6	Ⅰ. 低収入・生活苦	5	4.3
Ⅵ. 普通な・平凡な	8	10.4	Ⅳ. ベット	4	6.1	Ⅴ. 病気	5	4.3
Ⅱ. パート・アルバイト	7	9.1	Ⅳ. 海外暮らし	4	6.1	Ⅵ. さびしい・孤独な	5	4.3
Ⅲ. 配偶者の協力／支え	6	7.8	Ⅵ. 普通な・平凡な	4	6.1	Ⅱ. 仕事と家庭の両立	4	3.5
Ⅳ. 田舎暮らし・畑仕事	6	7.8	Ⅵ. 辛い・苦しい	4	6.1	Ⅲ. 独身	4	3.5
Ⅵ. 一生懸命な・頑張った	6	7.8	Ⅰ. 貯金	3	4.5	Ⅲ. 孫の誕生	4	3.5
Ⅰ. 貯金	5	6.5	Ⅰ. 安定した／十分な収入	3	4.5	Ⅳ. 海外暮らし	4	3.5
Ⅰ. 教育費	5	6.5	Ⅳ. 親との交流	3	4.5	Ⅵ. 辛い・苦しい	4	3.5
Ⅳ. 友人／社会との交流	5	6.5	Ⅴ. 健康・美容	3	4.5	Ⅵ. 生活に追われた・疲れた	4	3.5
Ⅳ. ベット	4	5.2	Ⅵ. さびしい・孤独な	3	4.5	Ⅱ. 早期退職	3	2.6
Ⅰ. 車購入	3	3.9	Ⅰ. 車購入	2	3.0	Ⅳ. ベット	3	2.6
Ⅲ. 独身	3	3.9	Ⅰ. 教育費	2	3.0	Ⅴ. 健康・美容	3	2.6
Ⅵ. 生活に追われた・疲れた	3	3.9	Ⅲ. 独身	2	3.0	Ⅰ. 車購入	2	1.7
Ⅵ. 楽しくない・つまらない	3	3.9	Ⅳ. 田舎暮らし・畑仕事	2	3.0	Ⅰ. 教育費	2	1.7
Ⅵ. 人間的に成長した	3	3.9	Ⅴ. 病気	2	3.0	Ⅲ. 配偶者の協力／支え	2	1.7
Ⅱ. 早期退職	2	2.6	Ⅵ. 生活に追われた・疲れた	2	3.0	Ⅳ. 親との交流	2	1.7
Ⅴ. 病気	2	2.6	Ⅵ. 人間的に成長した	2	3.0	Ⅱ. 解雇	1	0.9
Ⅴ. 死	2	2.6	Ⅰ. 低収入・生活苦	1	1.5	Ⅱ. 共働き	1	0.9
Ⅰ. 低収入・生活苦	1	1.3	Ⅱ. 共働き	1	1.5	Ⅱ. パート・アルバイト	1	0.9
Ⅱ. 解雇	1	1.3	Ⅲ. 配偶者の協力／支え	1	1.5	Ⅱ. 子の成長で仕事再開	0	0
Ⅳ. 海外暮らし	1	1.3	Ⅵ. 楽しくない・つまらない	1	1.5	Ⅲ. 家事	0	0
Ⅴ. 健康・美容	1	1.3	Ⅱ. 解雇	0	0	Ⅲ. 妻が専業主婦	0	0
Ⅵ. さびしい・孤独な	1	1.3	Ⅴ. 死	0	0	Ⅳ. 田舎暮らし・畑仕事	0	0

ローマ数字は上位カテゴリを示す

太字は残差分析で有意に多かったカテゴリ、網掛けは有意に少なかったカテゴリを示す

(2) 将来の希望度評定の分析

女子大学生、女子短大生、男子大学生で将来の希望度評定が異なるか、一元配置分散分析・多重比較（DunnettのT3）を行い検討した。結果、全ての希望度評定において群間に有意差が見出された（Table3）。仕事希望度、結婚希望度、子ども希望度は女子短大生が他2群より高かった。収入希望度は女子短大生が低く、勤続希望度は男子大学生が高かった。また、専業主婦希望度は、女子短大生が男子大学生よりも高かった。

Table3 将来の希望度評定の一元配置分散分析・多重比較結果

	女子大学生	女子短大生	男子大学生	<i>F</i> (2, 255)	多重比較結果 (DunnettのT3)
仕事希望度	4.19 (1.11)	4.71 (0.49)	4.24 (1.07)	6.31**	女大, 男大 < 女短
収入希望度	4.48 (0.64)	4.09 (0.87)	4.43 (0.83)	5.25**	女短 < 男大, 女大
勤続希望度	4.13 (1.13)	3.73 (1.09)	4.64 (0.74)	19.94***	女短, 女大 < 男大
結婚希望度	4.57 (0.91)	4.86 (0.43)	4.54 (0.83)	4.01*	男大, 女大 < 女短
子ども希望度	4.58 (0.97)	4.88 (0.41)	4.49 (0.98)	4.38*	男大, 女大 < 女短
専業主婦希望度	3.12 (1.47)	3.45 (1.37)	2.91 (1.20)	3.49*	男大 < 女短

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ カッコ内はSD
得点範囲: 1-5点

(3) 「母性愛」信奉傾向尺度および仕事観尺度の分析

「母性愛」信奉傾向尺度について信頼性係数（Cronbachの α 係数）を算出したところ、 $\alpha = .87$ と十分に高かった。

仕事観尺度20項目について、因子分析（主因子法・promax回転）を行った。因子負荷量が低かった4項目を省いた16項目について4因子構造を見出した。第1因子は、「仕事で頑張るには家族の理解が大切である」、「仕事を通して自分が成長する」、「仕事は人生に充実感をもたらす」、「仕事は自分にとって生きがいである」など8項目から成り、「自己実現」と命名した。第2因子は、「仕事は自分の自由な時間を奪う」、「仕事は家族と関わる時間を奪う」、「仕事の目的は経済的に家族を支えることである」、「仕事は人生の多くの部分を奪う」の4項目から成っていた。これは、仕事が負担であるが、経済的に働かざるを得ないという仕事観を表していると考えられるため、「負担・経済的手段」とした。第3因子は「自分にとって何より大切なのは仕事である」、「家庭のことで仕事を優先させたい」であり、「仕事優先」と命名した。第4因子は、「仕事をすることは社会への貢献である」、「仕事をすることは社会的義務である」から成り、「社会的責任」と名付けた。因子分析の結果と信頼性係数をTable4に示した。「負担・経済的手段」と「社

会的責任」の α 値がやや低めではあるが、一定の信頼性はあると考えられるため、下位尺度化して以後の分析に用いることとした。

Table4 仕事観尺度因子分析結果

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
自己実現 $\alpha=.77$				
・ 仕事で頑張るには家族の理解が大切である	.642	.289	-.227	-.093
・ 仕事を通して自分が成長する	.623	-.020	-.278	-.027
・ 仕事は人生に充実感をもたらす	.614	-.060	.043	-.018
・ 仕事は自分にとって生きがいである	.574	-.061	.231	.057
* 自分にとって仕事はあまり大きな価値をもたない	.514	.225	.045	-.006
・ 仕事をしない人生はむなしい	.472	.032	.180	-.073
・ 仕事は自分の人生を豊かにする	.459	.040	.151	.226
・ 仕事は自己実現の場である	.403	-.050	.183	.104
負担・経済的手段 $\alpha=.64$				
・ 仕事は自分の自由な時間を奪う	-.004	.741	-.014	.002
・ 仕事は家族と関わる時間を奪う	.024	.670	.095	-.103
・ 仕事の目的は経済的に家族を支えることである	.056	.411	-.025	.182
・ 仕事は人生の多くの時間を奪う	-.269	.398	.048	.113
仕事優先 $\alpha=.74$				
・ 自分にとって何より大切なのは仕事である	.025	.042	.795	-.046
・ 家庭のことより仕事を優先させたい	.010	.032	.750	-.036
社会的責任 $\alpha=.64$				
・ 仕事することは社会への貢献である	-.018	-.062	-.101	.896
・ 仕事することは社会的義務である	.006	.206	.023	.540

* 逆転項目

女子大学生、女子短大生、男子大学生ごとに、「母性愛」信奉傾向尺度と仕事観下位尺度間のPearsonの積率相関係数を算出した。女子大学生では、「母性愛」信奉傾向と「負担・経済的手段」間に $r=.39$ ($p<.001$) の相関があった。女子短大生では、「母性愛」信奉傾向と「負担・経済的手段」との間に $r=.39$ ($p<.001$)、「社会的責任」との間に $r=.25$ ($p<.05$) の相関が見られた。男子大学生では、「母性愛」信奉傾向と「自己実現」との間に $r=.30$ ($p<.001$)、「仕事優先」との間に $r=.20$ ($p<.05$) の相関があった。

将来の希望度評定はいずれも半分以上が「まったくあてはまる」か「ややあてはまる」と回答していたが、専業主婦希望度のみ回答にばらつきが見られた。そこで、専業主婦希望度による群分けを行った。将来について「自分/配偶者が専業主婦を希望する」の回答が「まったくあてはまる」か「ややあてはまる」の者を専業主婦志向高群とし、「どちらともいえない」を中群、「まったくあてはまらない」か「ややあてはまらない」を低群とした。女子大学生77名のうち、専業主婦志向高群は30名 (39.0%)、中群は23名 (29.9%)、低群は24名 (31.2%) であった。女子短大生66名では、高群32名 (48.5%)、中群17名 (25.8%)、低群17名 (25.8%) であった。

た。男子大学生115名のうち高群は30名（26.1%）、中群は50名（43.5%）、低群は35名（30.4%）であった。

専業主婦志向（高群・中群・低群）と大学・男女（女子大学生・女子短大生・男子大学生）を独立変数、「母性愛」信奉傾向と仕事観下位尺度を従属変数とした2要因分散分析を行った（Table5）。

「母性愛」信奉傾向において、全ての主効果が有意となった。多重比較の結果、女子短大生が女子大学生および男子大学生より有意に高く、また、専業主婦志向は高群、中群、低群の順に有意に高かった。

「負担・経済的手段」では、交互作用が有意であった。単純主効果の検定を行ったところ、専業主婦志向の全ての群において、大学・男女の単純主効果が有意であった（高群 $F(2,249)=3.10, p<.05$; 中群 $F(2,249)=4.49, p<.01$; 低群 $F(2,249)=5.94, p<.01$ ）。高群においては女子大学生が女子短大生より有意に高く、中群では男子大学生が女子短大生より有意に高く、低群では男子大学生が女子大学生・女子短大生より有意に高かった。また、女子大学生で専業主婦志向の単純主効果が有意となり（ $F(2,249)=5.66, p<.01$ ）、高群が低群より高かった。「負担・経済的手段」の得点は、専業主婦志向に関わらず女子短大生は低く男子大学生は高い傾向があるが、女子大学生は専業主婦志向によって異なっていた（Figure1）。

Table5 専業主婦志向と女子大学生・女子短大生・男子大学生による分散分析結果

	専業主婦 志向	「母性愛」 信奉傾向	自己実現	負担・ 経済的手段	仕事優先	社会的責任
女子大学生	高群	43.33(6.77)	24.07(3.00)	12.00(1.58)	3.60(0.86)	6.00(1.17)
	中群	38.04(6.71)	25.48(3.92)	11.09(2.66)	3.83(1.23)	6.04(1.69)
	低群	33.83(8.77)	26.33(3.51)	10.04(2.42)	4.04(1.43)	5.96(1.00)
女子短大生	高群	44.94(7.17)	26.06(3.02)	10.69(1.57)	3.38(1.24)	5.56(1.34)
	中群	41.94(7.01)	25.71(3.12)	10.06(1.82)	3.47(1.37)	5.01(1.20)
	低群	37.82(8.75)	27.12(3.28)	9.71(1.83)	3.59(1.18)	4.82(2.07)
男子大学生	高群	41.13(6.43)	26.13(4.17)	11.07(2.29)	3.97(1.45)	6.17(1.58)
	中群	36.54(8.89)	25.32(4.00)	11.90(2.27)	3.80(1.20)	6.02(1.53)
	低群	34.06(7.62)	25.26(3.97)	11.57(2.27)	3.80(1.55)	5.97(1.32)
主効果	専業主婦志向	21.20***	1.13	2.96	0.32	1.05
	大学・男女	6.21**	1.33	8.01***	1.83	8.56***
多重比較結果 (Tukey)	男大, 女大 < 女短 低群 < 中群 < 高群					女短 < 女大, 男大
交互作用		0.33	1.59	2.82*	0.44	0.45

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$ カッコ内はSD
得点範囲: 「母性愛」信奉傾向 12-60 点
自己実現 8-32 点
負担・経済的手段 4-16 点
仕事優先 2-8 点
社会的責任 2-8 点

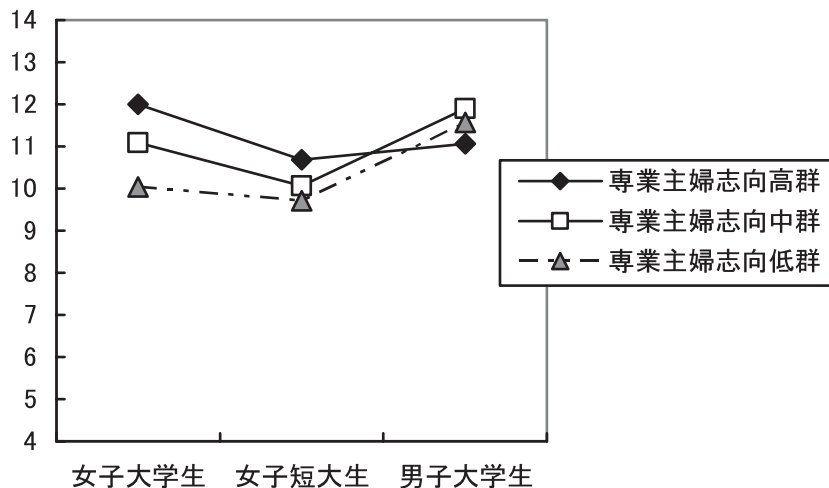


Figure1 「負担・経済的手段」の点数

「社会的責任」は、女子大学生・女子短大生・男子大学生で違いが見られ、女子短大生が有意に低かった。

4. 考察

将来像の自由記述では女子短大生と男子大学生の違いが目立った。女子短大生の将来像は、結婚・出産、配偶者・子ども・孫との関係といった家庭を中心としたもので構成されていた。一方、男子大学生は家庭に関する記述数は女性と比べて少なく、多かったのは仕事に関する記述であった。女子短大生も仕事に関する記述が多く見られたが、パートや子の成長に伴う仕事の再開、早期退職などが多く、就職・仕事そのものや仕事での成功などの記述は他群より少なかった。女子短大生の仕事は、結婚・出産するまでの一時的なもの、あるいは非典型的のものであり、あくまでも家庭を中心とした将来像を描いていることが明らかとなった。一方、女子大学生の将来像は、女子短大生と男性の中間に位置するものが多かった。従来の性別役割分業を前提とした将来像は女性全体が共有しているものではなく、学歴によって異なる、すなわち四年制大学よりも短期大学に所属する女性のほうが家庭中心のジェンダー・ステレオタイプな将来像を強く持っていることがわかった。

しかし、将来の希望度評定では、女子短大生のほうが他群よりも就きたい仕事を持っているという結果が得られた。女子短大生のほうが仕事への関与度が低い自由記述の結果とは一見矛盾する。これは、大学生よりも社会に出る年齢が早いことと、専攻が資格など職業に直結するものであるため、将来就く職業が定まりやすいためだろう。将来何をやりたいかについては、選択肢の幅があり進路決定までに猶予のある大学生の方が短大生に比べて悩みが深いと指摘されている（国眼, 2002）。なお、職業にもジェンダー・ステレオタイプが存在し、男性的と見なされる男性職と女性的と見なされる女性職が存在する（安達, 2009）。したがって、職業に就くことを志向していることが単純に性別役割分業に否定的であるとは見なせないことに注意が必

要である。女子短大生は収入希望度は他よりも、勤続希望度は男子大学生よりも低く、結婚や子ども、専業主婦への希望は高い。やはり仕事よりも結婚・出産に重きを置いていることが伺える。これまでの研究では、男性の将来展望は、職業上のステップアップと家族の形成・発達が矛盾せずに並行する直線的展望であるが、女性は結婚・出産による変化が予測しにくく将来展望を持ちにくいことが見出されている（園田, 2007）。しかし今回得られた結果では、特に女子短大生は志望の職、退職後の家庭中心の生き方、とむしろ確固とした将来像を描いているように見える。女子大学生と男子大学生の差が見られるのは勤続希望度だけであった。ジェンダー差よりも女性間の差が大きかったことは注目すべきである。ジェンダーによる違いよりも、場合によっては女性間の学歴など社会的階層による差が大きく影響するのである。

「母性愛」信奉傾向と仕事観の関係は、むしろジェンダー差のほうが大きかった。女子大学生も女子短大生も、母性愛を信奉しているほど、仕事を持つことを負担と感じやすい傾向があった。しかし、男子大学生は、母性愛を信奉しているほど、仕事による自己実現を目指し、仕事を優先する傾向があった。女性は母性愛を信奉していることが子ども中心の生活を送ることを意味するが、男性は働き手として社会で活躍することへ向かい、性別役割分業の支持につながる。専業主婦を志向するほど「母性愛」信奉傾向が高い結果からも、母性愛を信奉することと妻・母が専業主婦となることは明確に結びついていることがわかる。江上（2007）は、実際に専業主婦である女性のほうが、そうでない女性よりも「母性愛」信奉傾向が高いことを見出している。女子短大生は母性愛を信奉する程度は高く、仕事を通して社会貢献するという意識は低いことも明らかとなったが、仕事への負担感自体は女子短大生より男子大学生が高い傾向も同時に明らかとなった。男子大学生にとって、仕事はしなければならないものであるが、それは他を犠牲にして行われるもののようである。仕事を中心とした将来像を描いている男子大学生であるが、それは決して望んで行われているものではなく、他に選択肢が考えられない、と考えるのが妥当であろう。女子大学生は専業主婦志向が高い者の仕事への負担感が女子短大生よりも高かった。一方で、専業主婦になりたくないと考えている女子大学生の仕事の負担感は短大生と同じ程度に低かった。女子大学生は仕事の負担を大きく感じる場合に専業主婦という選択肢を考え、そうでない場合には仕事を持つことを志向するのであろう。短大に通う女性や男子大学生と比較して、四年制大学の女性は多様な選択肢の中から将来を選びとろうとしていると言える。仕事観についてジェンダーによる差は顕著ではなかった。しかし、福丸・無藤・飯長（1999）は、因子を構成する項目は本研究と若干異なるが、「充実・自己実現」、「制約・負担」、「仕事中心」、「経済的手段・義務」の全てにおいて子を持つ父親のほうが母親よりも高いという結果を得た。実際に家庭や仕事を持つ（もしくは持っていた）者のほうが、学生よりもジェンダー差が大きいのは、世代による差なのか、あるいは現実的な社会生活の中で仕事観が変わってくることを示しているのか、今後明らかにする必要がある。

本研究では、将来像にジェンダー差より女性の学歴差が大きく影響していたが、これが男性にもあてはまるのか、高卒者も含めた差がどうなのかについてはより詳細な検証が待たれる。また、今後は大学間の格差にも注目する必要がある。小倉（2007）は「新・専業主婦志向」が短大の減少と共に中堅以下の四年制大学的女子学生に移行していると指摘している。本研究

でも、女子大学生の専業主婦希望度や勤続希望度は女子短大生と差がなかった。男女共同参画社会の推進という理念とは逆に、厳しい経済状況と進学率の上昇にしたがって家庭中心の生き方が大学生にも浸透しつつあると考えられるが、難関大学と中堅以下の大学ではその意識にも差が見られるだろう。さらに、職業と直結している専門性の高い大学・学部かどうか、その職業におけるジェンダー比率なども考慮しつつ研究を行う必要がある。嘉数・石橋・上地・大城(2003)は、沖縄の四年制大学の女子学生は、沖縄および岡山の女子短大生と比較して、就業継続を望む者が多い一方、性別役割分業を肯定する者の割合が多いことを見出した。これは学歴やジェンダーだけではなく、地域差も考慮する必要性を示すものである。

家族形態の多様化やジェンダー意識の変化にも関わらず、実際の夫婦関係は伝統的性役割態度にとらわれているように(熊野, 2008)、本研究で得られた将来像も保守的なものが目立った。現在学生である1990年前後生まれの女性は4割近くが子どもを持たないと予想されているにも関わらず(山田, 2007)、結婚し、出産し、それに伴って女性は退職し、という生き方をほとんどの者(特に女性、なかでも特に女子短大生)は予想していた。未婚化・少子化という社会的変化が将来像に影響するのはどの年代からか、そのときどのように将来像が修正されていくのか、縦断的研究が望まれる。社会の変化と意識の変化は一致せず、属している層によって変化のスピードと方向性は異なるのである。

あとがき

本研究の一部は、日本心理学会第74回大会(2010年9月20日、於大阪大学)および日本心理学会第75回大会(2011年9月15日、於日本大学)で発表した。

引用文献

- 安達智子 2009 職業のジェンダー認知と自己効力II～男性職は男っぽく、女性職は女らしい? 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 40
- Aono, A. & Kashiwagi, K. 2011 Myth or fact: Conceptions and realities of Japanese women/mothers. *Feminism & Psychology*, 21 (4), 516-521
- 江上園子 2005 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全 発達心理学研究, 16(2), 122-134
- 江上園子 2007 “母性愛” 信奉傾向と幼児への感情表出に及ぼす影響～職業要因との関連 心理学研究, 78(2), 148-156
- 福丸由佳・無藤 隆・飯長喜一郎 1999 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観～父親の育児参加との関連 発達心理学研究, 10(3), 189-198
- Gilbert, L. A. & Rader, J. 2001 Current perspectives on women's adult roles: Work, family, and life. In R. K. Unger (Ed.), *Handbook of the psychology of women and gender*. New York: John Wiley & Sons. (武知優子(訳))
- 2004 女性の成人役割についての現代の展望～仕事、家庭、生活 森永康子・青野篤子・福富 護(監訳) 女性とジェンダーの心理学ハンドブック 北大路書房, 189-205
- 平川(上野)淳子・尾崎仁美 2000 達成動機研究における方法論の検討と課題 大阪大学教育学年報, 5, 85-98
- 嘉数朝子・石橋由美・上地亜矢子・大城りえ 2003 女子大生の家族観と性差観～学歴と地域差 琉球大

- 学教育学部教育実践総合センター紀要, 10, 47-55
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値～今、なぜ子を産むか 教育心理学研究, 47, 170-179
- 国眼真理子 2002 女性らしさと自分らしさの間で～青年期 岡本祐子・松下美和子(編) 新女性のためのライフサイクル心理学 福村出版, 81-125
- 国立社会保障・人口問題研究所 2011 第14回出生動向基本調査結婚と出産に関する全国調査～独身者調査 (http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.pdf)
- 厚生省 1998 平成10年版厚生白書 (<http://www.whakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpaz199801/b0013.html>)
- 熊野道子 2008 家族とジェンダー 青野篤子・赤澤淳子・松並知子(編) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版, 131-148
- 目黒依子 2000 女性の高学歴化とジェンダー革命の可能性 目黒依子・矢野澄子(編) 少子化時代のジェンダーと母親意識 新曜社, 9-28
- 百瀬 良 2009 専業主婦の「個」として生きる志向～自尊感情との関連 家族心理学研究, 23(1), 23-35
- 永久ひさ子 2010 成人期・老年期における発達研究の動向 教育心理学年報, 49, 67-76
- 永久ひさ子・渡邊恵子・柏木恵子 2007 母親における資源配分と自己評価～高学歴化と個人化傾向の関連について 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 442
- 内閣府 2009 男女共同参画社会に関する世論調査 (<http://www8.cao.go.jp/survey/h21/h21-danjo/index.html>)
- 内閣府 2011 平成23年版子ども・子育て白書 (<http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2011/23pdfhonpen/23honpen.html>)
- 内閣府男女共同参画局 2007 女性のライフプランニング支援に関する調査 (<http://www.gender.go.jp/danjo-kaigi/kansieikyo/raifupuran1903.pdf>)
- 内閣府男女共同参画局 2009 男女のライフスタイルに関する意識調査 (<http://www.gender.go.jp/research/lifestyle/index.html>)
- 大野祥子 2008 育児期男性の生活スタイルの多様化～“稼ぎ手役割”にこだわらない新しい男性の出現 家族心理学研究, 22(2), 107-118
- 小倉千加子 2007 結婚の条件 朝日新聞出版
- 白川俊之 2008 若年労働市場における非典型雇用・無業とジェンダー～JGSS統合データによる分析から JGSSで見た日本人の意識と行動: 日本版General Social Surveys研究論文集, 7 (JGSS Research Series No.4), 133-145
- 園田直子 2007 時間的展望研究の動向～文化・ジェンダー・社会変動 都筑 学・白井利明(編) 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版, 118-133
- 武知優子 2008 思春期・青年期とジェンダー 青野篤子・赤澤淳子・松並知子(編) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版, 20-36
- 東福寺一郎 2010 短期大学生の男女共同参画意識(Ⅱ)～質問紙調査に基づいて 三重短期大学紀要, 58, 39-47
- 若松素子・柏木恵子 1994 「親となること」による発達～職業と学歴はどう関係しているか 発達研究, 10, 83-98
- Woollett, A. & Marshall, H. 2001 Motherhood and mothering. In R. K. Unger (Ed.), Handbook of the psychology of women and gender. New York: John Wiley & Sons. (仲野由里子(訳) 2004 母性と母親的養育 森永康子・青野篤子・福富 護(監訳) 女性とジェンダーの心理学ハンドブック 北大路書房, 206-220)
- 山田昌弘 1999 家族のリストラクチュアリング～21世紀の夫婦・親子はどう生き残るか 新曜社
- 山田昌弘 2007 少子社会日本～もうひとつの格差のゆくえ 岩波書店